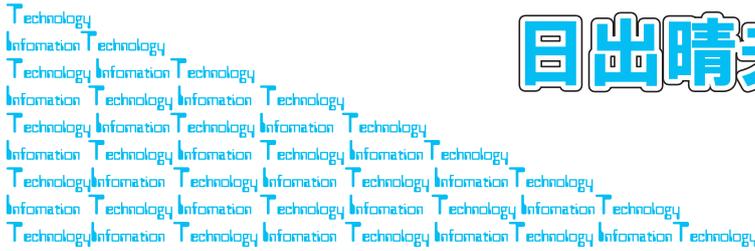


「下」な話

日出晴夫の



日出 晴夫

中小企業診断士。阿南市在住

<http://www.facebook.com/haruo.hinode>

一月です

二月です。早いもので、今年も後、二ヶ月を残すのみとなりました。この季節には、もの思うことが多いものです。感傷的になることが多いのもこの季節の特徴かも知れません

感傷的になるということは、一面、過去を想うことでもあります。過去というのは、人生の事象の連続として捉えられるべきでしょう。そして、一つの事象というのは、一つのイメージとして連綿と記憶に残るものです。強烈なイメージであれば、そのこと自体で、イメージを

形成します。個人的には、小学校の入学、高校入試、大学入試、就職、結婚、昇進、左遷：などは、鮮明に記憶に残るものなのです。

そして、多くの記憶は忘却の彼方へ追いやられて行きます。これも至極、当然のことなのです。全てのことを覚えていたのであれば、脳の記憶領域(少なくとも活性化している部分、コンピュータ的にはメモリー領域と呼ぶべきでしょう。)はパンクするのは必須です。しかし、人は現在のみに生きるのではなく、現在の中に生きるべきではありません。では、どうするべきでしょうか？

舞台は、一里塚

慮れば、新劇というジャンルに接して、彼是、四〇数年が経過したことになっています。あの頃は…あの舞台を見た頃は…、様々な記憶が蘇るものです。とりわけ、学生時代を経て、職業に就き、それなりの社会生活を送る頃、見た舞台の印象は、

その時の出来事、人との出会い、政治的思惑、などを絡めて、記憶の中を走馬灯のように巡るものです。

人・俳優との出会い

舞台は、最終的に、人との出会いに尽きるものです。個人的な接触があるわけではありませんが、少々、紹介させて下さい。

①『やなせたかし』さん

徳島市民劇場14年5月例会は、「見上げてごらん夜の星を」でした、その前年に「やなせたかし」さんの計報を聞きました。この、あまりにも有名なミュージカルの美術担当をされていたのです。音楽担当の「いずみたく」が有名ですが、この美術担当者の名前は、微妙に記憶に残っていたものです。

後日、「アンパンマン」が、あまりにも有名になったのですが、舞台創りの感性がアニメという形で活かされる

ことに魅かれたものでした。このキャラクタの偉大さは、遍く、子ども達に受け入れられたという事実でしょう。あの単純な線づかいと、簡単明瞭なストーリー、人格確立期前後の幼児にとつてのヒーローそのものなのです。

そして、何より好感を持てるのは、このキャラを作者、やなせ先生が世に送り出したのは、氏が六〇歳を過ぎてからであったということです。創作意欲の旺盛さにも驚かされる事実です

②『熊倉一雄』さん

人との出会いは楽しいものです。とりわけ、感性的な感化を受けるキャラクタとの出会いは素晴らしいものです。それは思想家であったり、舞台人であったり、局面は様々ではありますが、人生の機微に応じた思い出を与えてくれました。

氏は、昭和31年に劇団「テアトル・エコー」に参加し、

以来、半世紀以上にわたり、井上ひさしさんの喜劇などで俳優や演出家として活躍されました。この過程で、私個人の新劇史と重なる訳です。個人的には、何と言つても、昭和50年に見た「二匹の猫」が印象に残っています。原作は井上ひさし、演出・主演が熊倉一雄というスタイルがお気に入りとなりました。ユーモアたっぷりな舞台進行と、錯綜する劇中劇。最終局面でのどんでん返し。意外性に満ちた展開。そして何よりの面白さとヒューマニズム。全てにおいて心躍る舞台が続いたものでした。

個人的な関わりの世界での氏との最後の舞台と云えるのは、12年1月のテアトルエコーの作品「フレディ」でした。氏は、この舞台では、監修という役割のようで、実際に舞台上に立っていたわけではありません。期待していたわけではありませんが、劇中の二部のナレーションが氏の声でした。あの懐か

図①；市民劇場：2016年11月例会ポスター

ACORN

松井須磨子

まぐな十七娘 恋をあらた
今や世界 歌へー

花子

出演
栗原小巻
音楽《ピアノ》城所 潔

構成・演出
加来英治

美術-石井雄司 / 衣裳デザイン-栗原小巻 / 照明-山本博史 / 音響-西田 実 / 舞台監督-大山慎一

★あわぎんホール
11月28日(月)夜6時半
11月29日(火)昼2時

★鳴門市文化会館
11月27日(日)夜6時半

TEL 088-653-1752
FAX 088-653-1755

徳島市民劇場

近代演劇史上に、一瞬の花を咲かせ、儚く散った、日本新劇最初的女優、松井須磨子。芸術への深い愛、人生の機微を、独自の形で、物語は進行する。

しく可愛くもある声でした。

紹介させていただいた御二人は既に故人となって居られます。計報が、かつての記憶を呼び覚まし、感性の活性化を齎すということは事実でしょう。

然しながら、それ以外の機会でも、出会いと感性の活性化はあるものです。現在、私自身、徳島市民劇場の会員を持続しております

す。謂わば、自動的に舞台を用意してくれる仕組みです。この11月例会が、その機会を用意してくれました。

『栗原小巻』さん

図①は、徳島市民劇場11月例会チラシです。松井須磨子という女優さんは、既に歴史上の人物になっています。「日本初の整形美人女優」と称されることもあり、話題性には欠けません

図②；キャスト



栗原小巻さん

が、流石に、アイドル視した思い出を持つ人は存命されてはいないでしょう。対して、今回、主演の栗原小巻さん、(図②)。45年生まれ、(和暦ではありません。西暦です)。御年、70歳を超えています。

吉永小百合さんと並ぶ昭和の大大女優。それぞれのファンを称してコマキスト、サユリストと世間を騒がせていたものです。老若男女を問わず憧れの存在になっていたものです。

文学・芸術に携わる父・栗原一登の影響も有り、美貌に劣らず芸術分野諸々の才媛でもあります。

最近でも舞台では、まだまだ健在とのことで、今回の例会企画となったのです。

加えて、この作品は、一人芝居なのです。上演時間は一時間二〇分、体力も必要です。昭和の姫様の健闘を祈ります。

末尾は、栗原小巻氏の、今回の企画に寄せた二言です。宜しくお願いします。

松井須磨子さんが、新しい演劇、新しい女性像を創造しました。この作品で、芸術の喜び、その苦悩を演じる事ができればと願っています。鑑賞運動、市民劇場と共に、わたくしの俳優人生はあります。

感謝と希望——